分野別研究組織中間報告（2010 年度）

ポスト・オスマン期から世界大戦期に至る パリ都市空間形成と近代建築の展開

Development of Modern Architecture through the Urbanisme in Paris during the period of Post-Haussmann and the World Wars.

松本　裕（MATSUMOTO Yutaka）

歴史都市パリでは、市壁の解体・再構築による市域拡大と数々の都市内改造が行われた結果、幾重にも織重なる特徴的な都市組織が形成されている。本研究では、こうしたパリ市の発展を跡付ける典型的な場所を選定し、「都市組織（tissu urbain）」の具体的な重層過程の図化・分析を通じ、それが近代の都市再開発において、都市を下支えする基盤的なインフラとして如何に関与し新しい都市景観創造につながったのかを実証的に解明する。

2010（H22）年度は、市壁の解体・拡張、パッサージュ・クヴェール、グラン・ブルヴァールと呼ばれる大通りやオスマンによる都市大改造などが都市組織として重層しているパリ市の旧市街地（ボンヌ・ヌーヴェル地区、マイユ地区、レ・アール地区）を対象として現地調査を行った。

当該研究対象地区において、パリ市による誘導的都市形成から「ユルバニスム」概念への展開を研究テーマに掲げ、具体的には、「ポスト・オスマン期」から「世界大戦期」にかけての都市計画の変遷を、（1）建築法規制面、（2）行政指導面、（3）都市建築思潮面、という切り口から資料収集と現地調査・分析を行った。（1）と（2）に関しては、パリ市第 II 区のレオミュール通り、ルーヴル通り、エティエンヌ・マルセル通りを対象に作業を行った。その結果として、当該道路開設事業において、「ポスト・オスマン期」に制定された建築高さと道路壁面の張り出しに関する規制緩和（1882、1884、1902 年）ならびに受賞建築の税金半額免除等を掲げた「ファサード・コンクール」（1898-1912 年）による特別な建築許可によって、誘導的都市形成がなされた実態を一次資料（建築許可申請書など）から明らかにした。

こうしてパリ市は積極的に、オスマン型の画一的な景観から新しい時代に相応しい華やかな街路空間への脱皮を促した。その後、「世界大戦期」にかけて「メトロポリス」化への対応が急務となり、パリ市の誘導的政策に通底する都市の「美観整備」という考え方から、巨大化した都市のより複雑な諸問題に対応するための「ユルバニスム」の概念へと展開がなされていく。その代表的思潮として、ルイ・ボニエ、ル・コルビュジエ、オーギュスト・ペレ、アンリ・ソヴァージュ、マレ・ステヴァンスといった近代建築家・都市計画家らによる都市の拡張と高層化プロジェクトに関して、資料収集・整理を行った。

さらに、2011 年度以降に作業を予定しているGIS（地理情報システム）を用いた図化・分析の実施―ボンヌ・ヌーヴェル地区とマイユ地区で展開された局所的な変遷をより広範な都市組織

との関係において位置づけることが目的である―のために、2010 年度には、これまで部分的に作成してきた当該地区に関する都市組織図をGISソフト間でデータ移行(SISからArc-GISへ)する作業を実施した。

今後は、これらの基礎データをもとに、〈1〉オスマンのパリ大改造計画による都市組織の大規模再編の詳細を[1]オスマン在任中(1853-1870)に実施された開設道路、[2]「ポスト・オスマン」期に継続実施された開設道路、の2点に分けて検証する計画である。